竹取物語

作者

作者は不明。「竹取物語」が漢文訓読語を交えた和文で書かれ、神仙譚をはじめとする漢籍、仏典、日本の歴史や地理に関する知識が活用されていることから、男性文人の手になると見るのが通説である。源順（みなもとのしたごう）、源融（みなもとのとおる）、僧正遍昭（そうじょうへんじょう）、紀長谷雄（きのはせお）などの諸説があるが、いずれも確証を欠く。この他に、空海の漢文原作を遍昭が和文化したとする説、斎部（いんべ）氏、漆部（ぬりべ）氏、賀茂氏といった特定の氏族の中で作られたとする説もある。

出典

▼**底本**

新日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語」（堀内秀晃・秋山虔校注、平成九〔一九九七〕年、岩波書店刊）によった。

▼**諸本**

「竹取物語」は平安時代前期に成立したが、現存伝本は室町時代末期までしかさかのぼれない。伝本は通行本と古本とに大別される。新日本古典文学大系の底本である天理図書館蔵本（武藤元信氏旧蔵本）は、天正二十（一五九二）年の書写であり、通行本を代表する伝本の一つである。

▼**書名**

一般に「竹取物語」と呼ばれるが、「竹取翁物語」「竹物語」と題する伝本もある。また、「源氏物語」では、「かぐや姫の物語」（蓬生巻）、「竹取の翁」（絵合巻）と呼ばれる。

▼**成立**

九世紀末から十世紀初頭の成立とされる。かぐや姫の昇天の部分に、「六衛の府（つかさ）」「頭中将（とうのちゅうじょう）」など、弘仁（こうにん）年間（八一〇〜八二四）設置の官司・官職名があるので、それ以降の成立であることは確実だが、仮名文字の普及、和歌における掛詞・縁語の発達を考慮すると、成立の上限は、貞観（じょうがん）年間（八五九〜八七七）頃だと言える。また、「大和物語」第七十七段に「竹取物語」を踏まえた和歌があり、これが延喜（えんぎ）九（九〇九）年の作と推定されるので、その頃には成立していたと言える。さらに、物語末尾に富士山の煙が「いまだ雲の中へ立ち上る」とあるのに対し、「古今和歌集」仮名序には「今は富士の山も煙立たずなり」とあることから、「古今和歌集」成立の延喜五年が成立の下限とも見られる。

▼**内容**

「竹取物語」の内容は、大きく四部に分けられる。天人女房譚と認められるかぐや姫の出現と退去との間に、五人の貴公子と帝による求婚の物語が挟み込まれる形である。

(1)かぐや姫の生い立ち（天人女房譚・小さ子譚・致富長者譚）
(2)五人の貴公子の求婚…五つの難題（求婚難題譚）
　①石作（いしづくり）の皇子……仏の御石の鉢

②庫持の皇子……蓬萊の玉の枝
③阿倍の右大臣……火鼠の皮衣
④大伴の大納言……竜の頸の珠
⑤石上の中納言……燕の子安貝

(3)帝の求婚（求婚譚）

(4)かぐや姫の昇天（昇天譚・天人女房譚）

天人女房譚は、天女が天から降りて来て地上の人間とともに暮らすものの、後に別れるという話の型である（羽衣伝説の類）。かぐや姫は最終的に昇天するので、姫が出現し、翁・嫗の養女となる部分も天人女房譚と捉えられる。さらに、非常に小さく生まれた子が特別な能力を持つ小さ子譚（「一寸法師」など）、異界の者や動物を引き受けた人物に富がもたらされる致富長者譚（「洟垂小僧様」など）といった物語の典型的な型が冒頭部を形作っている。

姫が成長すると、物語は求婚譚に移行する。翁は、特別熱心に求婚する五人の貴公子の一人と結婚するよう、姫に勧める。姫が愛情を測るためとして出した五つの難題は、どれも実在すら不明な品物の要求であった。通常の難題求婚譚と異なり、女性が求婚者を退けるための難題である。かぐや姫は、石作の皇子の仏の御石の鉢はすぐに偽物と見破るが、庫持の皇子が用意した精巧な偽物には苦労した。間一髪のところで工人たちが玉の枝製作の報酬を要求しに現れ、姫は助かる。阿倍の右大臣は偽の皮衣を買わされていた。大伴の大納言は、自ら竜の頸の珠の探索に船出するが、嵐に遭い、かぐや姫を恨む。石上の中納言は、子安貝を得るため高所に昇って転落し、死去する。手にしていたのは燕の糞であった。貴公子たちの物語は身分の順に配列され、各々人間の愚かさを描く。一方、かぐや姫にも変化が生じ、中納言の死には同情し、自ら和歌を贈った。江戸時代の加納諸平以来、貴公子たちは「日本書紀」「続日本紀」に見える実在人物に基づくと考えられている。五人が皆失敗をし、最も身分の低い中納言だけが姫の同情を得られた点に物語作者の社会批判が読み取れる。また、難題譚の部分は作者の独創性が高いと認められていたが、チベットで採取された民話「斑竹姑娘」に、類似した五つの難題があることが一九七〇年代になって知られた。両者共通の原話の有無などは解明されていない。

かぐや姫の評判を聞いた帝は、内侍中臣房子を翁の家に派遣する。姫は、居丈高な態度の内侍と対面せず、勅命を畏れ多いとも思わない。天皇の権威に屈しない姫の言動にも、作者の批判的想像力がある。いったんは姫の意向を尊重した翁も、帝から官位を条件に出され、狩の行幸を装って帝が直接来訪する計画に同意する。姫は窮地に立たされるが、帝に袖をつかまれながら、「きと影にな」って拒み通した。帝が無理強いをしないからもとの姿に戻るよう懇願すると、姫は応ずる。超人的な力で主張を通しつつも、相手に憎まれず愛される、しなやかな人物像がある。姫と帝との間には、三年にわたる手紙の往来があった。

天人女房譚の型に沿って、物語は終末部へ進む。月を見て嘆くようになった姫は、八月十五夜が近づいてようやく、自分は月の人であり、十五夜に帰ると告白する。翁の訴えを聞いた帝は、兵士二千人を派遣するが、やって来た月からの使者たちに対しては無力であった。かぐや姫は、翁・嫗に別れを告げ、帝に不死の薬

と手紙とを残して去る。不老不死の月の世界に帰るよりも、老いていく翁たちとともにいたいというかぐや姫であったが、天の羽衣を着ると人間的感情を失って昇天した。翁たちは悲嘆に暮れ、帝は、最も高い山（富士山）の頂上で、薬と手紙とを焼かせた。

このように、「竹取物語」は種々の話の型を組み合わせて成り立つが、さらに「…さる時よりなむ、「よばひ」とは言ひける」など、節目節目に語源譚の形も取り込んでいる。

参考文献

❊教師用

▽注釈書

日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語　大和物語」
阪倉篤義他　岩波書店　昭三十二

新日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語」堀内秀晃・秋山虔
岩波書店　平九

新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」片桐洋一他
小学館　平六

「竹取物語評解」増訂版　三谷栄一
有精堂　昭六十三

「竹取物語全評釈」上坂信男　右文書院　平二、十二

「竹取物語　現代語訳対照・索引付」大井田晴彦
笠間書院　平二十四

新潮日本古典集成新装版「竹取物語」野口元大
新潮社　平二十六

「新版　竹取物語」（角川ソフィア文庫）室伏信助
角川学芸出版　平十三

文法解説「竹取物語・伊勢物語」（付　大和物語）
日栄社　昭四十八

文法鑑賞「竹取物語新解釈」三谷栄一著
有精堂出版　昭五十六

古典　読解と演習「竹取物語・伊勢物語」伊藤秀利
朋友出版株式会社　昭六十

▽研究書

日本文学研究大成「竹取物語・伊勢物語」片桐洋一編
国書刊行会　昭六十三

「平安朝文学と漢文世界」渡辺秀夫
勉誠社　平三

「竹取物語の研究ー達成と変容」奥津春雄　翰林書房　平十二

「平安物語叙述論」藤井貞和
東京大学出版会　平十三

「かぐや姫幻想」新装版小嶋菜温子
森話社　平十四

「源氏物語の文学史」高田祐彦
東京大学出版会　平十五

「物語史の解析学」土方洋一
風間書房　平十六

「竹取物語論ー神話／系譜学」関根賢司
おうふう　平十七

「益田勝実の仕事2」益田勝実
筑摩書房　平十八

「竹取物語本文集成」王朝物語史研究会
勉誠出版　平二十

▽入門書・研究案内

鑑賞日本古典文学「竹取物語・宇津保物語」三谷栄一他
角川書店　昭五十

鑑賞日本の古典「伊勢物語・竹取物語・宇津保物語」藤岡忠美他
尚学図書　昭五十六

研究資料日本古典文学「物語文学」
明治書院　昭五十八

「平安文学研究ハンドブック」田中登他　和泉書院　平十六
「『竹取物語』から「かぐや姫」へ――物語の誕生と継承」
斉藤みか　東京堂出版　令二

❊生徒用

「竹取物語（全）」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）角川書店編　角川学芸出版　平十三
「知ってる古文の知らない魅力」鈴木健一　講談社　平十八
「竹取物語」江國香織　新潮社　平二十
「かぐや姫と王権神話『竹取物語』・天皇・火山神話」
保立道久　洋泉社　平二十二
「日本語の古典」山口仲美　岩波書店　平二十三
「物語のいでき始めのおや『竹取物語』入門」原國人
新典社　平二十四

図版解説　**〈竹取物語絵巻〉**

國學院大學図書館蔵。書写年代江戸時代前期。絵巻。三巻。表紙は、梅花・菊花亀甲織文。絵は、上巻に六面、中巻に七面、下巻に五面。箱書に「竹取物語三巻　詞書青蓮院宮尊鎮親王御筆　絵　狩野永徳法印筆」とある。絵は住吉絵風で元禄頃のものと思われる。本文は古本系統の京大夫、池田亀鑑旧蔵の高安本と同じ。単元トビラには月を見て嘆くかぐや姫を描いた場面、本文の挿絵は翁が籠に入れてかぐや姫を養う場面を採録した。

⇩P45・47